

「簡明性」こそ技術開発の プライオリティ

(財)ファインセラミックスセンター
専務理事兼試験研究所長

柳田 博明

Hiroaki Yanagida
Japan Fine Ceramics Center
Director, Research Institute

技術と社会・市民の関係が昨今、深刻に議論されるようになった。筆者の昨年（1996年）春の東大最終講義も「材料 技術 社会」と題されたものであったし、1995年秋オックスフォード大学で開催された日英シンポジウムも「科学技術と社会」であった。また、技術と社会・市民の関係を改めて問わなければならない残念な事態が数多く発生している。

技術は確かに生活を豊かにそして便利にしてきた。われわれはこの成果をエンジョイしている。しかし最近の技術の開発は少々誤った方向に進んでいるのではないだろうか。筆者は懸念している。まず技術がごく限られた専門家にしか理解できない複雑難解なものになってしまった。また複雑難解なものほど高度の技術であるという誤った価値観がはびこってしまっている。この結果、市民には疎外感を覚えさせ、何か事件が起こるたび不信感をつのらせてしまっている。

生物の進化も限られた地域で進むと特殊なものになっていく。生物の多様性のためには、この特殊な種は保存しなければならない。しかし、何らかの原因で地域間の交流が発生すると、これら特殊な種は、よほど保護しない限り衰退滅亡の途を辿るのが一般的である。あまりにも一部のグループだけに開発を委ねてしまった技術はこのような特殊性と脆弱性を有しているのではないだろうか。専門家集団だけで想定していたものと異なる事態が発生したときのパニックは特殊な生物種が受けってしまう脆弱性と共通するものがありはしないだろうか。

筆者の提案する技術開発のプライオリティ（最優先項目）は「簡明さの追求」である。こうすることにより多くの人の知恵を集めることができる。その中には



専門家集団には思いもつかぬ優れたアイデアもあるであろう。アマチュアとプロフェッショナルの関係も、わが国では「アマチュア」といって軽蔑しすぎる。アマチュアこそ既存の枠にとらわれない発想ができる人として尊敬さすべきなのである。

技術が簡明になれば、専門家と市民の対話ももっと理性的なものになるであろう。現在は「絶対安全」を専門家が唱え、市民が要求する。その矛盾が昨今頻発しているのである。世に絶対というものはありませんし、もし追求するとなるととてつもなく高価なものになる。その高価さはどこまで市民が許容できるものなのか、許容できないとするなら何もしないほうがよいのか、もう少し対話を積み重ねるべきであろう。「衆知を集める」という言葉がある。「衆の情」だけでなく「知」もぜひ集めたいものだ。

真に知のある技術は「簡明性」に裏打ちされたものであると筆者は信じ、提唱する。